

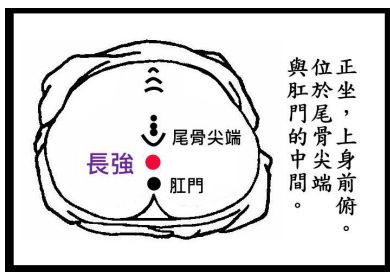


乙字湯

これは原南陽の作った処方、叢桂亭医事小言の中に「痔疾・脱肛・痛楚（痛みが甚だしいこと）或ハ下血陽風、或ハ前陰痒痛スルモノヲ治ス」とあり、これが乙字湯の主治です。さらに同書には「こういう状態で乙字湯を長く服薬して効果のない場合は、理中湯（人参湯に膠飴（アメ）を加えたもの）に変方した方がよい」と記載されています。

南陽がこの薬方を作ったいきさつは、文献にないのでよくわかりませんが、彼が作った乙字湯は小柴胡湯から人参・半夏を抜き、大黄・升麻を加えたものです。ところが、その後浅田宗伯がこれをさらに変方し、大棗・生姜を抜き、大黄・升麻に当帰を加えた形にしました。エキス剤の乙字湯は当帰・柴胡・黄芩・甘草・升麻・大黄で、原南陽の方剤ではなく、浅田宗伯が作り直した処方です。

南陽が小柴胡湯から人参・半夏を抜き大黄・升麻を入れた乙字湯は、脱肛を対象としてつくられたものです。酒客に多い疾病であり、軽い時は手で納るが竈花瘡の如く表われるものに対して考案されたものです。痔は古い疾患で、素問・靈枢にも出てきますが、脱肛の症状は、痔疾がかなり進行した状態で起こった疾病で、決して初期症状ではありません。単なるイボ痔（痔核）には乙字湯より長強



というツボに灸をした方が効果がある、と南陽は述

べています。従って、南陽の乙字湯は慢性の痔疾で、症状増悪期に与える薬方としてつくられたものです。初期の痔核には不適です。しかし、宗伯が当帰を加えることで、初期の痔核にも適応することになります。当帰は精油成分に鎮痛・鎮

静作用があり、ビタミン E 欠乏症に対して効果があるなど、様々な意味で血のめぐりをよくし、血虚に効果のある駆瘀血剤です。その意床で現在の処方痔核（イボ痔）にも一定有効です。しかし、升麻と柴胡の組み合わせが原南陽の考えた薬方で、それによって升提作用、つまり機能が低下し、臓器が下垂しているもの、つまり脱肛のみならず、子宮脱も含め、内臓の下垂した機能を改善することを目的に作られた処方です。

本方は、痔疾の代表的な薬方で、便秘傾向があり、局所に痛みがある場合に与えられますが、ごく初期の内痔核には、桂枝茯苓丸ないし四物湯と小柴胡湯の合方（柴胡四物湯）がよいと考えています。なお、痛みの強い場合は、甘草エキスを加味することが必要です。甘草は「急迫ヲ治ス」といわれますようにイライラ感の強い痛みに対して有効です。

また南陽は、小柴胡湯加減として大黄を加味していますが、単に瀉下作用を目的としているわけではありません。大黄には多種類の Oxyanthraquinone 誘導体（瀉下成分）を含有しています。一般的に大黄は瀉下作用が知られていますが、瀉下作用が強ければ優秀な大黄かという、決してそうではありません。といいますのは、漢方では「大黄は単なる下剤」という考え方ではなく、むしろ主作用は消炎です。つまり「結実を治す」と言われ、消炎効果を期待しています。かつて九州大学薬学部におられた西岡五夫先生は、大黄中に非常に有力な抗菌性物質を検出されています。つまり大黄を加えることは単なる下剤としてではなく、痔疾に対する消炎作用を目的に入れたのではないかと思います。

ちなみに、現在この乙字湯は痔疾が適応症となっていますが、出血が甚だしい場合は三黄瀉心湯の兼用が良いと考えられます。一般に下半身の出血には芎歸膠艾湯が繁用され、上半身の出血には三黄瀉心湯がよいとされます。ところが痔出血には、まず三黄瀉心湯が適応になります。

また大柴胡湯がイボ痔・キレ痔を使用目標にされていますが、実際の臨床では小柴胡湯の適応症が多いように思います。しかし、残念なことに保険診療上、小柴胡湯の適応に痔疾は載っていません。また瘀血証（元々痔疾は静脈のうっ滞ですから瘀血ですね）の場合には、桂枝茯苓丸も効果があります。更に「臍下ニ結毒有り、之ヲ按ジテ即チ痛ミ、便膿血スルモノヲ治ス」の大黃牡丹皮湯も、化膿性炎症のある痔疾に有効です。イライラして、気上衝ある場合には桃核承気湯もよいでしょう。こうした薬分で症状が増悪する場合は陰証の側面が考えられますから、補中益気湯の適応ということになります。

エキス剤で、痔疾を中心に各処方 of 適応症を調べてみますと、そういった関係処方が出てきます。で、使いやすい四物湯、さらに先ほど述べました四物湯と小柴胡湯の合方（柴胡四物湯）、便秘があれば緩下剤を併用していきます。また、補中益気湯の他に陰証の方剤として、人參湯が適応する痔疾患があります。

痔疾は非常に多い疾病ですが、乙字湯が比較的長い経過の人に対する薬方であり、初期の痔に対する薬方でないことを知っておいていただきたいと思えます。ですから、いま挙げた各処方を虚実・陰陽の意床を含み、痔疾患に対応していただきたいんです。「痔」という病名に対して、どういった病態でも乙字湯…と対応するのは間違いです。人參湯とは別に、小建中湯でよくなることもあるかと思えます。これらの関係を理解して使っていただければ、大体痔疾に対応できるかと思えます。

なお、痔疾に対しては食養生が大切です。紀州の華岡青州は五辛（ニラ、ラッキョウ、ネギ、ニンニク、姜）と生肉を禁じています。その他、力作業、怒り、旅行、お酒、大食を戒めています。現代でも参考になりますね。

【原南陽先生 甲字湯のこと】

南陽が創った処方には甲乙丙丁を冠したものがあり、乙字湯は柴胡・黄芩・升麻・大黃・甘草・大棗・生姜の七味からなる処方でしたが、浅田宗伯が当帰を加え、大棗・生姜を除いて六味とし、エキス剤として保険収載されています。甲字湯は桂枝茯苓丸に生姜と甘草を加味したもので、瘀血の激しいものに用いられます。